

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K16731

研究課題名（和文）15世紀ローマの壁画装飾事業にみられる競合意識について

研究課題名（英文）Rivalry in mural painting projects in fifteenth-century Rome

研究代表者

荒木 文果（ARAKI, Fumika）

慶應義塾大学・理工学部（日吉）・准教授

研究者番号：40768800

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、15世紀にローマおよびフィレンツェで制作された6つの壁画を対象に、各作例の特異な図像表現や画面構成が当時担っていた意味について考察し、それらを画家同士もしくは壁画を所有する托鉢修道会間の競合意識と結びつけることで、従来個別に考察されてきた芸術事業の関連性について多くの新知見を国内外の場で提示した。なかでも、本研究の一部をまとめ、ローマで出版した自著 *Le cappelle Bufalini e Carafa* (Campisano Editore, 2019) が、アジア圏からは初となる第61回「ダリア・ボルゲーゼ賞」（2022年）に選ばれたことを最大の成果として挙げたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、線的に語られる傾向のあった15世紀ローマ美術史を、より面的な広がりを持つものとして提示した点で新規性に富む。その際、現存しない壁画や従来の美術史学では十分に注意がはらわれてこなかった作例、関連する板絵や写本にも目を向けた点に学術的意義があると言える。さらに、口頭発表や講演、論文投稿を通して、新知見を積極的に国内外で公表し、研究成果を社会に還元するよう努めた。また、イタリアの伝統ある学術賞「ダリア・ボルゲーゼ賞」の受賞により、我が国の西洋美術史研究が国際的なレベルにあることを世界に向けて発信できたと確信する。

研究成果の概要（英文）：This study discussed the significant iconographies and composition of six mural paintings frescoed in Rome and Florence during the 15th century and the meanings they had expressed at that time. In addition, by connecting these art projects to the rivalry between painters or two major Mendicant Orders for the first time (research on them at that time has tended to be conducted separately), the research representative presented numerous new insights at domestic and international venues. Among them, the research representative would like to mention the single-authored book *Le cappelle Bufalini e Carafa* (Campisano Editore, Rome 2019), the summary of a part of these studies was awarded the 61st Daria Borghese Prize (2022), a first from Asia and the most prominent achievement.

研究分野：西洋美術史

キーワード：イタリア 中世美術 ルネサンス美術 ローマ 壁画

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

15世紀ローマの壁画装飾事業では、ローマ在住の画家だけでなく、ローマに招聘された多くの外来の画家たちが活躍した。ローマの町を舞台に繰り広げられたイタリア中の画家たちの競演は、15世紀ローマ美術を特徴づける要素であると共に、その地の芸術に多様性をもたらした。一方でこのような制作の在り方は、様式分析による流派形成の観察を中心に据えた従来の研究方法では、この時代・地域の美術史の一側面しか語りえないという状況を招いていたように思われた。特に、外来画家たちのモノグラフにおいて、彼らのローマでの仕事は、各々の様式発展の一部として論じられるのが常であり、15世紀ローマ美術を通史的に記述する際には、各々の事業の関係性や芸術家間の競合意識について、十分な関心が払われてこなかったのである。これまで研究代表者は、15世紀にローマで制作された壁画装飾事業に関する研究を行ってきた。2012年にローマ第一大学に提出した博士論文(イタリア語)では、1480年代にローマで制作が開始された2つの礼拝堂壁画、プファリーニ礼拝堂壁画とカラファ礼拝堂壁画を取り上げ、特にローマという場との関わりを重視しながら、各壁画について新しい図像学・図像解釈学上の論を提示した。その過程で浮かび上がってきたのは、従来、無関係と見做されていた両壁画の背後に、それぞれの礼拝堂を所有するサンタ・マリア・イン・アラチェリ聖堂のフランシスコ会士とサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂のドミニコ会士との競合意識が存在し、それが礼拝堂の壁画に視覚的な痕跡を残しているという事実であった。また、日本学術振興会特別研究員(PD)採用時には、教皇シクストゥス4世の発案で、プファリーニ礼拝堂壁画およびカラファ礼拝堂壁画装飾事業の直前に制作されたヴァチカンのシステリーナ礼拝堂壁画に関する研究を遂行した。そして、同時期に同じ空間で制作を行った4名の親方のうち、特にポッティチェリが有した画家としての高い自意識が壁画に可視化されている可能性を国内外の学会で指摘した。これら一連の研究により、15世紀ローマで制作された複数の壁画装飾を競合意識という観点から検討することで、当時の壁画が有していた関係性の解明、ひいては15世紀ローマ美術の実態解明に繋がるのではないかと考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、15世紀に「競演の場」ローマで制作された数点の壁画を取り上げ、画家同士及びパトロン同士の競合意識に注目しながら、従来個別に考察されてきた各芸術事業の関連性を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

方法として、様式分析、図像学・図像解釈学的検討、壁画の描かれた場所のコンテキストの調査といった多角的な作業を駆使した。

4. 研究成果

本研究は、15世紀ローマの壁画装飾事業にみられる競合意識および各事業の関連性の解明を目指した。結果として、当初の想定よりもはるかに多くの新知見を国内外の場で提案できたように思われる。また、考察対象とする作品の時間的・地理的広がりが一層豊かとなった点で、「若手B」の研究としてふさわしい成果が得られたと確信する。以下に研究成果を年度ごとの時系列に沿って説明する。

2016年度は、プファリーニ礼拝堂壁画に関する論考を深め、第34回国際美術史学会(9月・北京)で口頭発表を行った。その内容は学会報告書集のなかで公開されている(英語)。フランシスコ会であったシエナの聖ベルナルディーノに捧げられたプファリーニ礼拝堂の壁面には、1480年代前半にウンブリアの画家ベルナルド・ピントリッキオによって、聖人伝に取材した逸話が描かれた。前項で述べたように、研究代表者はすでに本壁画について、図像学・図像解釈学的観点から研究を重ねてきたが、本研究では特に、通常は聖ベルナルディーノとともに描かれるアトリビュートがまったく表象されていない理由について、列聖運動と関連付けながら考察を行った。研究会等で意見交換を行ったうえで、国際美術史学会ではS・フロイトのタブーの概念を援用しながら、これまで特別な意味をもたない装飾とみなされてきた礼拝堂下部のモチーフである聖人のアトリビュートに似た形象にこそ、壁画制作当時の聖人に対する熱狂的な崇敬が示されていることを新たに提言した。

2017年度は、ミネルヴァ聖堂第一廻廊装飾壁画に関する研究を進めた。15世紀半ばに、スペイン人枢機卿ファン・デ・トルケマダがフィレンツェの画家フラ・アンジェリコに制作を依頼したと考えられているフレスコ画群である。注文主も画家もともにドミニコ修道会士である本壁画は、完成の約1世紀後にすべて失われたものの、現存する写本や挿絵印刷本から、壁画の主題や図像がある程度特定されている。それによると、壁面にはトルケマダ枢機卿が執筆した

Meditationes Vitae Christi (『キリストの生涯に関する観想』)に基づいた物語場面と祈禱文、そして座って瞑想する修道士の図像が多数描かれていたとされる。本壁画については、長く作者帰属や制作年代に関心が寄せられてきたが、研究代表者は、これまで議論的となつてこなかった修道士の図像に注目し、その背景にあるドミニコ修道会の精神性や図像の典拠、機能を探った。結果、本廻廊装飾における修道士の図像の源泉は、写本装飾にしばしば登場する同モチーフにあることを突き止めた。さらに、それが写本において果たした役割と同様に、鑑賞者を祈禱と瞑想へ導くと共に、壁画を通じて、ドミニコ修道会のアイデンティティを喧伝していたことを明らかにした。また観想文学において、当時のヨーロッパで圧倒的な影響力を誇っていたフランシスコ会による同名の書物との関わりから、ミネルヴァの廻廊装飾には、写本を想起させる画面構成が必要であった可能性を指摘した。以上の考察は、既に学会誌『西洋中世研究』に掲載されている(日本語)。また、トルケマダ枢機卿と1480年代にミネルヴァ聖堂のカラファ礼拝堂壁画制作を依頼したカラファ枢機卿との関連性についても考察を進め、米国ルネサンス学会(ニューオーリンズ、3月)で口頭発表を行い、広く意見交換を行った(英語)。

2018年度は、15世紀のシステーナ礼拝堂壁画装飾事業について論考を深めた。本事業は、教皇シクストゥス4世の発案で、フィレンツェとウンブリア地方から当代一流と目されていた画家たちがローマに招聘され、システーナ礼拝堂の壁面にモーセ伝とキリスト伝連作を中心とするフレスコ画を制作したものである。その制作現場は、画家たちの共同制作の場であると共に、競演の舞台でもあった。2018年度の研究実績として、まず2本の論文を執筆・投稿し、いずれも採用された点を挙げたい。『慶應義塾大学 日吉紀要』に投稿した英語論文では、研究テーマである「競合意識」を扱う前提として、16画面からなるモーセ伝とキリスト伝連作の制作順序について新たな論を提示した。また、学会誌『デアルテ』に投稿した論文(日本語)では、フィレンツェの画家ポッティチェリとウンブリア地方出身の画家ペルジーノの画面を丁寧に考察し、そこにポッティチェリの画家としての強い自意識と他の画家に対する競合意識を読み取った。次に、イタリアのカンピサーノ社から著書を出版した(イタリア語)。5章からなる本書では、2018年度に公表した論考の一部の内容を含め、15世紀ローマにおける最大の美術事業の成果とみなされるシステーナ礼拝堂壁画とこれまで論じてきたブファリーニ礼拝堂壁画およびカラファ礼拝堂壁画との関連性を明らかにしながら、同時代の画家同士および注文主同士の競合意識について多角的に論じた。

2019年度は、産休育休による約1年間の研究中断期間があったため、研究が大きく進展したとは言えなかった。しかしながら、前年度に採用決定済みとなっていた前述の論文2本について、適宜加筆修正を加え、無事公表することができた。さらに、我が国初のヴァザーリ著『美術家列伝』の全翻訳という一大プロジェクトに参加し、「フィリッピーノ伝」の解題・翻訳・訳注を担当した。

2020年度は、コロナ禍によるオンライン授業準備や各種対応、産休明け直後で生活環境が大きく変わり、個人研究の遂行もままならない状況であった。そこで、様々な制約のなかでも達成できる内容を検討し、本助成の課題である「競合」という問題意識を、研究対象とした画家のひとりフィリッピーノ・リッピがフィレンツェで取り組んだ活動に応用して考察を行った。結果的には、本研究によって、画家のローマでの活動をより俯瞰的にとらえることが可能となったと言える。1480年代初頭、フィレンツェの画家フィリッピーノは、独立した画家として初めて壁画制作に取り組む。1420年代にマザッチョとマゾリーノが着手し、未完のまま残されていたプランカッチ礼拝堂壁画を完成させる仕事である。様式論を基盤とした先行研究は、本礼拝堂壁画からフィリッピーノ特有の様式的な特徴を抽出し、画家の画業に位置づけようとしてきたが、この画家の仕事に対する近年の解説は、同じ内容を繰り返すだけとなっている印象が否めなかった。それに対して本研究では、本芸術事業を過去の画家たちとの一種の共同制作という視点で初めてとらえ、反フィリッピーノ様式にも光を当てながら制作の実態解明に取り組んだ。まず、アルベルティーニとヴァザーリによる16世紀の記述を精読し、両者ともマザッチョが途中まで描いていた壁面を完成させる作業と真っ白のまま残されていた壁面に新しくフレスコ画を描く作業とを異なる性質をもった仕事と捉えていた可能性を指摘した。そのうえで、壁画の仔細な観察とフィリッピーノの同時期の作品との比較を通して、画家自身もまた同様の意識を有し、前者ではマザッチョの時代の様式を積極的に採用し、後者では礼拝堂壁画全体の調和に配慮しながらも画家の個性を發揮しようとしたことを明示した。以上から浮かび上がってきたのは、模倣と革新の間で揺れ動く画家の心理的側面である。この研究成果は、既に『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』に英語論文として掲載されている。

2021年度は、ローマのサント・スピリト・イン・サッシア病院にある教皇シクストゥス4世の生涯に取材した逸話を中心とした44場面からなるフレスコ画連作に関する考察を進めた。母胎内での逸話から天国に召されるまでのシクストゥス4世の生涯が、その存命中に絵画化された、類例のない作品である。本壁画については、伝来する関連史料が乏しく保存状態も悪いため、美術史的観点からの研究は困難を極めてきた。それに対して本研究は、この壁画の視覚的特異性として次の2点に注目した。ひとつめは装飾写本を思わせる画面構成である。本壁画は、多数の物語画面からなり、各場面の下の大きな区画に、人文主義者バルトロメオ・プラティナの『教皇伝』から引かれた長い銘文が刻まれている。ふたつめは繰り返し登場する教皇の肖像の存在である。連作において教皇は30回以上登場するが、当時これほど多くの肖像画を残した教皇はほかにいない。そして、壁画制作にさきだち新たに書物が編まれたという制作の経緯や本壁画の視覚

的特異性が、ドミニコ会のローマ市街地における活動拠点であったミネルヴァ聖堂第一廻廊の失われた壁画にも共通して確認されることを指摘した。さらに、この一致は単なる偶然ではなく、フランシスコ会士であった教皇のドミニコ会に対する競合意識と関連付けて考えうる可能性を新しく提言した。この提案については、既に研究会やシンポジウムで公表し、多くの助言を得たうえで、『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』に投稿し、掲載された（英語）。また、Hiyoshi Research Portfolio 2021でのポスター発表（慶應義塾大学日吉キャンパス）に参加し、これまでの研究の一部を広く公開した（日本語）。2022年度は、二大托鉢修道会の競合意識が確認される作例として『キリストの生涯の観想』に関わるテキストと美術作品を比較・検討し、14世紀から15世紀のイタリアを中心としたフランシスコ会とドミニコ会の内的ヴィジョン形成のあり方や宗教画像に対する見解の相違を示した。そのうえで、先述したフランシスコ会出身の教皇シクストゥス4世の命により、1470年代にローマで制作されたサント・スピリト病院の壁画もまた同様のコンテクストで考察すべき作例であることを新たに提示し、その壁画を15世紀ローマ美術史のなかに位置づけた。研究遂行の諸段階で、リーズ大学で開催された国際中世学会（7月）や美術史学会東支部例会（1月）、研究会等で口頭発表を行い、意見交換の場を得た。既に考察の一部について英語で論文を公表済み、論考全体については日本語で論文集（出版準備中）に寄稿済みである。2022年度の研究実績として、さらに以下2点の報告をしたい。2018年度にイタリア語で出版した自著が、アジア圏からは初となる第61回ダリア・ボルゲーゼ賞に選ばれた。5月にローマで行われた授賞式にて講演を行い、旧交を温めるとともに多くの研究者と親交を深めることができた。ケンブリッジ大学出版から依頼されたフィリッピーノ・リッピの論文集（2019）に対する書評が、ルネサンス研究において権威ある学術雑誌 *Renaissance Quarterly* に掲載された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 FUMIKA ARAKI	4. 巻 37
2. 論文標題 Illuminated Manuscripts Frescoed in the 15th Century in Rome	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要『人文科学』	6. 最初と最後の頁 37-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 FUMIKA ARAKI	4. 巻 78 (3)
2. 論文標題 Book Review of Filippino Lippi: Beauty, Invention and Intelligence, ed. Paula Nuttall et al., Leiden, 2020	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Renaissance Quarterly	6. 最初と最後の頁 987-988
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FUMIKA ARAKI	4. 巻 36
2. 論文標題 Filippino Lippi in the Brancacci Chapel	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要『人文科学』	6. 最初と最後の頁 107-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木文果	4. 巻 2
2. 論文標題 「フィレンツェの画家 フィリッピーノ・リッピ」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『ジョルジョ・ヴァザーリ 美術家列伝』	6. 最初と最後の頁 635-648
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木文果	4. 巻 35
2. 論文標題 「共作」と「競作」のはざままで 15世紀のシステーナ礼拝堂壁画装飾事業におけるピエトロ・ベルジーノとサンドロ・ボッティチェリ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 デアルテ	6. 最初と最後の頁 89-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11501/4423959	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FUMIKA ARAKI	4. 巻 34
2. 論文標題 A New Proposal on the Chronological Order of the Moses and the Christ Frescoes in the Sistine Chapel	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要 『人文科学』	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒木文果	4. 巻 9
2. 論文標題 瞑想するドメニコ会士 ローマ、サンタ・マリア・ソブラ・ミネルヴァ修道院の失われた第一廻廊装飾壁画	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 64 93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FUMIKA ARAKI	4. 巻 16
2. 論文標題 Il tema del cagnolino e del bambino nella pittura del Rinascimento: La variante di Filippino Lippi.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Atti del convegno "Giornata degli Italianisti" nell'ambito della XVI edizione della Settimana della lingua italiana nel mondo (仮)	6. 最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 FUMIKA ARAKI	4. 巻 2
2. 論文標題 Absent Monogram and Repressed Memory: The Disputed Legitimacy of Saint Bernardino of Siena in Late Fifteenth-Century Rome	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of 34th World Congress of Art History	6. 最初と最後の頁 894-900
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 FUMIKA ARAKI
2. 発表標題 LXI Premio Daria Borghese: Le Cappelle Bufalini e Carafa
3. 学会等名 Cerimonia di consegna dei premi Daria e Livio Giuseppe Borghese per il 2022, Palazzo Borghese, Roma (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 FUMIKA ARAKI
2. 発表標題 Franciscan and Dominican Art for the Sake of Jubilee Years in the 15th Century Rome
3. 学会等名 International Medieval Congress, University of Leeds (UK) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荒木文果
2. 発表標題 サンタ・マリア・ソブラ・ミネルヴァ聖堂カラファ礼拝堂
3. 学会等名 芸術文化教養講座、大分県立美術館 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荒木文果
2. 発表標題 サンタ・マリア・ソブラ・ミネルヴァ聖堂カラファ礼拝堂
3. 学会等名 芸術文化教養講座、大分県立美術館（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 荒木文果
2. 発表標題 『キリストの生涯の観想』をめぐる二大托鉢修道会のイメージ戦略
3. 学会等名 美術史学会東支部例会、オンライン
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荒木文果
2. 発表標題 ローマ、サント・スピリト病院《シクストゥス4世の生涯》壁画の特異性と二大托鉢修道会に関わる美術作品との関係性について
3. 学会等名 「托鉢修道会の司牧革命におけるメディアの総合的研究」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荒木文果
2. 発表標題 巨大な装飾写本：ローマ、サント・スピリト・イン・サッシア病院「教皇シクストゥス4世の生涯」の壁画におけるフランシスコ修道会美術の影響について
3. 学会等名 シンポジウム「東西中世における修道院・寺社の書物文化 制作・教育・世界観の変容」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荒木文果
2. 発表標題 瞑想するドメニコ会士たち ローマ、サンタ・マリア・ソブラ・ミネルヴァ修道院の失われた第一廻廊装飾壁画
3. 学会等名 第19回藝術学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 荒木文果
2. 発表標題 ドメニコ修道会の祈とう法について
3. 学会等名 第10回総合文化学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Fumika ARAKI
2. 発表標題 Cardinal Oliviero's Utilization of the Iconography of the Confraternity of the Annunciation in Late-Quattrocento Rome
3. 学会等名 Renaissance Society of America 2018 Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 FUMIKA ARAKI
2. 発表標題 Il tema del cagnolino e del bambino nella pittura del Rinascimento. La variante di Filippino Lippi.
3. 学会等名 “Giornata degli Italianisti” nell'ambito della XVI edizione della Settimana della lingua italiana nel mondo (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 FUMIKA ARAKI
2. 発表標題 Absent Monogram and Repressed Memory: The Disputed Legitimacy of Saint Bernardino of Siena in Late Fifteenth-Century Rome
3. 学会等名 34th World Congress of Art History (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 荒木 文果
2. 発表標題 「15世紀ローマにおける聖人称揚と美術 フランチェスコ会の活動を中心に」
3. 学会等名 研究と交流の場「研究の現場から」
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 荒木 文果
2. 発表標題 「美術史における表象不可能性について」
3. 学会等名 第7回総合文化学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 FUMIKA ARAKI	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Campisano Editore	5. 総ページ数 169
3. 書名 Le cappelle Bufalini e Carafa: Dall' odio dottorinale e culturale tra domenicani e francescani alle rivarita' artistiche	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------